

第26回TSRU会議

結核サーベイランス研究会

平成12年5月10日～12日／東京

結核研究所疫学研究部 統計解析科長 大森正子

2000年のTSRU (Tuberculosis Surveillance Research Unit) 会議は5月10日～12日、東京の市ヶ谷で開催された。アルカディア市ヶ谷10階の開放的なロビーからは、眼下に広がる外濠沿いの木々の新緑を眺めることができ、小さいながらも心のオアシスを感じさせる心地よい会場であった。今回の世話人は結核研究所森亨所長で、99年3月のヘルシンキでの会議以降、1年2カ月ぶりの会議となった。

TSRUは、66年にオランダ結核予防会とWHOの働きかけでIUA T (現在のIUA TLD) の下部組織としてつくられた会とこのことで、

規模は小さいながら持ち回りで会議を開き今日に至っている。この会は初めは低蔓延国の結核対策のあり方を追求し、現在の結核疫学の評価に重要な方法論が論じられ、その後会員の国で実践されるという経緯を踏んできた。その中心であったのはオランダの故スティープ博士であるが、今回の討議の最中も、参加者の一人が、彼の聖書とも呼ぶべき初感染発病、内因性再燃、外来性再感染発病の図をさらさらと白板に描いて議論する一幕もあり、感慨深い一瞬であった。

現在のTSRUは低蔓延国に加え、高蔓延国、中蔓延国の問題も取り上

げるようになったが、それに伴い研究報告や事業報告的な発表が増えてきたようである。各国で結核対策に携わる参加者が、IUA TLDやWHOからの参加者にWHOが各国に求めている情報や評価について現場サイドからの問題や意見を述べる場面もあった。

今回の参加国は15カ国とIUA TLD、WHOであり、参加者は会員18名、ゲスト35名であった。日本での開催は13年ぶり2回目、日本からは17名が参加し、9名が発表した。

2日半の会議の進め方は、半日ごとのセッションが設定され、各5～6題の演題発表と簡単な質疑応答の後、助言者がセッションすべての発表について15分間講評し、さらに会場との討議を約1時間にわたって行うものであった。このことから、一般の学会に比べかなり討議を重視しているのが分かる。それぞれのセッションの題と内容は以下の通りである。

(1) 健康経済(貧困と結核、DOTSのコストと効果2編、米国刑務所での結核感染者の発見とコスト、TBワクチンの世界的な需要)

(2) 結核問題の大きさと傾向 対策の影響(日本の結核疫学2編、結核の無作為調査、タンザニアの結核患者のHIV陽性率の傾向、多剤耐性結核が高い地域での治療効果の理論的推計)

(3) DOTS 結核対策の組織的な面から(バンガラデシ都市部とネパール高地、ネパールでの受診・診断の遅れの性差、オランダの移民の結核患者スクリーニング、中進国での結核対策問題、フィリピンの新しい結核対策紹介)

(4) RFLP研究(ノルウェーの移民と自国民のクラスター分析、オランダの結核感染の背景、沖縄の分子疫学研究、韓国の高校での結核集団感染)

(5) 自由発表(スイスの治療成績、ツベルクリン調査の見直し、モデル分析から、ツベルクリンと結核感染の関連性の検討、オランダから高蔓延国への旅行者の感染危険、タイ国北部のHIV蔓延地での多剤耐性結核)

なお、次の会議は2001年3月にスイス(場所は未定)で開催される予定である。